町民文芸

只見短歌会

七月詠草　　大塚栄一　指導

頭にて逆道辿れば忘れゐし歌思ひ出す不思議に出合ふ　五十嵐　夏美

帰り来る家族ねぎらひ玄関に打ちゆく水はたちまち乾く　古川　英子

若く逝きし子が好みたる紫陽花を思ひて再度花供へたり　吉津　政枝

埼玉に住む甥が来て尺八を聞かせてくれぬこぶし苑にて　五十嵐　英子

振り向けば通りすがりの男らが菅笠かむる我を撮りゐる　目黒　富子

降り続く梅雨を厭ふも被害なくむごき被災地のテレビに見入る　渡部　ゆき子

子も孫も着る当てもなき紬にて炬燵布団を幾枚も縫ふ　皆川　恒子

ここち良き風に吹かれて布団干す雲ひとつなき梅雨の晴れ間に　齊藤　ちひろ

春の香を懐かしみ摘む山椒のするどき刺は我が手にささる　馬場　八智

右左確認もせず道よぎる老人の耳は聞こえぬらしき　渡部　ヨリ子

施設より外泊に来て川べりの夏の花火に姉は声あぐ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会

八月例会　　目黒十一　指導

割って入る絵ろうそく屋の夏のれん　笑羊

千個の灯生む火起師の上布かな　リウコ

木苺を刈り残しおく墓掃除　吉児

草刈につかれ一夜の眠られず　敦子

梅雨明けや赤い衣の六地蔵　礼

梅漬ける一年の無事念じつつ　新じゃがの次も次もと掘る日中

結葉や浅草岳を遙かにす　修一

豆植うる畑空かせぬ母なりし　茄子抱かい夕暮れ時の立ち話　一灯

山法師下向く花はなかりけり　庭の蛇隣の嫁に黙っとこ　邦男

縄文の土器の復元雲の峰　キュウリもむ味噌の香りのする夕べ

風を切る旗指物や御野馬追　子供歌舞伎のカツラ下地に汗にじみ　隆堂

勘高き主将の指示や青あらし　扇風機いらぬ我が家の午睡かな　邦夫

散歩径変えてみたれば道おしい　風鈴の音も引越す駐在所　康女

夕暮れやほたる袋に灯の欲しき　大き夢吊られ七夕竹たわむ　恒夫

足音に寄る大岩魚飼われおり　原爆忌みんな秣を刈りおりし